

## 5 結語

今回の発掘調査では、薬師寺十字廊とその周辺に関するさまざまな知見を得ることができた。中でも十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定したことは、大きな成果である。また、十字廊の周辺の施設、特に北方や東方の空間利用についても、新たな知見を得ることができた。このことは、薬師寺内部の施設配置という面だけでなく、全国的にもほとんど明らかにされていない古代寺院における食堂背後の具体的な様相を明らかにしたという面でも、貴重な成果となった。

調査の主な成果をまとめると、以下の通りである。なお、十字廊の遺構は一時期分しか検出しておらず、これが建立当初のものとみられる。『薬師寺縁起』には、十字廊が天禄4年(973)に火災により焼失した後、寛弘2年(1005)に再建されたとの記述があるが、昭和52年度におこなわれた十字廊西半の発掘調査同様、今回も明確な建て替えの痕跡は確認されなかった。ただし、後述するように、十字廊の基壇を壊す土坑SK3114からは多量の炭とともに10世紀後半の土器が出土しており、天禄4年にあったとされる火災後の片づけとの関連性を検討課題として残す。

### (1) 薬師寺十字廊の建築

**十字廊の規模** 今回の発掘調査と過去の成果を合わせて検討した結果、薬師寺十字廊は東西44.4m(150尺)、南北約21m(70尺)の基壇をもつ礎石建物で、建物については、東西廊が桁行11間、梁行1間、南北廊が桁行4間以上、梁行1間であることが判明した。建物規模は、東西41.7m(141)尺、南北14.5m(49尺)以上と推定される。この数値は、東西廊については『薬師寺縁起』に記された規模に一致する。柱間寸法は、東西廊桁行が中央間約5.0m(17尺)、その外側各2間が約3.8m(13尺)、両脇各3間が約3.5m(12尺)、梁行が約5.0m(17尺)と想定された。南に並立する食堂の東西長を41.4m(140尺)ないし40.7m(137.5尺)とする復元案(『薬師寺概報Ⅰ』)と照らし合わせると、十字廊の建物は食堂のそれよりもわずかに長いことになる。

南北廊については、基壇の南北端位置が遺構で確認できないため、その長さが『薬師寺縁起』の記載通りかは不明である。ただし、十字廊の建物が現状で判明している礎石据付痕跡よりも少なくとも北へは1間のびる可能性が高いことや、周囲の遺構との関係から推測される基壇規模からみて、南北廊についてもやはり『薬師寺縁起』に記された規模と大差ないものと推定される。柱間寸法は、検出された北1間が約3.5m(12尺)、東西廊との接続部が約5.0m(17尺)、南2間が約3.0m(10尺)である。

**十字廊の上部構造** 『薬師寺縁起』には「高九尺二寸」とされており、柱間寸法からみればやや短い、廊としては妥当な大きさであろう。柱配置からは切妻造の屋根と考えられ、南北廊と東西廊の梁行規模が同じであることから、両者の棟高や軒高は同じ高さであったとみられる。柱位置と雨落溝の関係から軒の出は1.8～2.5m(6～8.5尺)であり、少なくとも手先の出ない組物を備えた建物と考えられる。なお、前述のように建物南北端の柱位置が不明のため、現状では南北廊基壇の南辺および北辺の柱位置からの出は過大となっている。また、出土瓦の種類と量からみて、本瓦葺であることは疑いない。

**基壇築成の工程** 検出された基壇は、後世の遺構により平面的に一部が完全に破壊されているだけでなく、全体として上部を大きく削平されているものと考えられた。基壇は、地山上や、地山を掘り込んだ面の上に、周辺と一体的な整地を施し、その後版築により積み上げる。基壇外装は、マウンド状に積まれた基壇土の縁辺部を切り込んで基壇外装の据付溝を掘り、地覆石を置かず羽目石を据え、

その後あるいはそれと同時に素掘り（東西廊より北側）ないし川原石敷の雨落溝（同南側）を掘削する。川原石を用いる部分では、掘付溝を掘り川原石を据えた後、周辺の整地を施している。

また、21箇所で見出した礎石据付痕跡は、いずれも上部を大きく削平されているものの、東西廊と南北廊の接続部を中心として、壺地業による強化をはかっている。礎石据付穴は、基壇をある程度積み上げた段階で掘削されている。

## （2）十字廊の造営と廃絶の年代

**十字廊の造営年代** 『薬師寺報告』において、十字廊の造営年代は奈良時代後半頃とされていたが、今回の発掘調査結果もこれと整合する。十字廊SB3100の礎石据付痕跡や、基壇外装SX3126からは、薬師寺201型式（6641G）の軒平瓦など薬師寺創建瓦が出土し、瓦型式の年代のみからは奈良時代前半にも遡りうるが、前述の昭和52年度の調査において確認している層位関係から、奈良時代後半にまで下げるのが妥当である。また、十字廊の建立に関わる遺構から平安時代以降の遺物が出土しないため、建立時期の下限は平安時代より古い。さらに、建立当初のものと判断される基壇外装のうち、SX3126に用いられた羽目石が地獄谷産であることは、平城宮内において、奈良時代前半には二上山産を用い、同後半に多く春日山（地獄谷）産を用いるという傾向（『平城宮発掘調査報告XIV』奈文研1993）とも付合する。

**十字廊の廃絶年代** 十字廊の基壇を壊している土坑群から10世紀や11世紀の土器が粉炭や炭化材とともに出土していることは、十字廊の廃絶や再建年代を考える手がかりとなると考えられる。土坑SK3114は十字廊SB3100基壇内の東北入隅部付近に位置し、10世紀後半の土師器甕・杯が出土している。同遺構は土坑SK3112・SK3113、溝SD3109によって上部を掘りこまれているため、SK3114の掘削後、十字廊SB3100が再建されたかどうかは検証できない。また、十字廊SB3100の外側に分布する廃棄土坑であるSK3107からも、微小な炭化材とともに10世紀後半から末頃に位置づけられる黒色土器碗が出土している。

土坑SK3114の上層に位置し、十字廊基壇を破壊する土坑SK3113からは、SK3114よりやや時代の下る11世紀代の瓦器が出土している。同遺構出土遺物全体についての検討が不可欠ではあるが、十字廊の存続時期の下限を考える上で、一つの参考にはなるであろう。

ただし、出土遺物は膨大な量に上っており、本概報で扱うことができたのはごく一部に過ぎない。出土遺物に対する体系的な整理検討は今後の課題であり、前述の土坑群の性格とともに、その时期的な位置づけについては、遺構・遺物に対する十分な検討をへて、改めておこなわれるべきものである。

## （3）十字廊周辺の様相

**十字廊の東方** 今回の調査により、十字廊SB3100の東方には、想定通りに東小子房SB3120が存在し、この北側柱列が十字廊東西廊の南側柱列の延長線上に位置することが判明した。これは西僧房における様相と酷似しており、一部の範囲に対する発掘にとどまるが、対称性が高いとみてよいだろう。十字廊東西廊東妻と東小子房西妻の間の距離は約6.0m（20尺）で、十字廊の西妻と西小子房の東妻の間の距離とはほぼ等しい。

また、十字廊の北東で、東小子房の西妻から北にのびる南北塀SA3137を検出した。十字廊北方の空間を考えるうえで、重要な成果である。なお、西大寺においては、宝亀11年（780）成立の『西大寺

資材流記帳』にあらわれる「殿」に比定できる礎石建物の東方で、食堂院を南北に仕切る掘立柱塀が検出されているが（『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈文研 2007）、SA3137がこれと類似した機能を持っていた可能性もある。

**十字廊の北方** 十字廊の北方では参道と推定される石敷SX3110と、さらにその北方に位置する礎石建物SB3101を検出した。また、これらの東方では掘立柱建物SB3102、SB3103、SB3104を合わせて検出した。いずれの遺構も検出範囲が狭小あるため、これらの性格を議論するには十分でない。ただし、規則的な配置関係を示す石敷SX3110と礎石建物SB3101が、十字廊と無関係とは考えがたい。十字廊を含む食堂と関連する建物群が、十字廊よりもさらに北に広がって展開していたと想定できる。

#### （４）他の寺院との比較

古代寺院において、食堂背後の空間が明らかになっている事例はほとんどない。奈良市の西大寺は、資財帳の内容とあわせて、発掘調査によって食堂を取り囲む「食堂院」の様相が具体的に判明した希少な事例である。これによれば、食堂院においては、南から食堂・殿・大炊殿が中軸を揃えてならび、食堂と殿は3本、殿と大炊殿は1本の軒廊によって結ばれる（前掲『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』）。「食堂院」にはこの他にも東西の檜皮厨や甲双倉などの建物が存在し、食堂での活動と関連した諸施設が多数必要だったことがわかる。

資財帳から食堂背後の様相を知ることができる事例としては、前述の西大寺のほかにも同じく奈良市に所在する興福寺・元興寺・大安寺・東大寺などがあり、なかでも東大寺については、正倉院中倉所蔵の『殿堂平面図』に、食堂の背後に付属するT字形平面の建物が描かれている。この形態は、興福寺でも同様に復元されている。また、元興寺については明確な位置を知り得ないものの、食堂と食殿が南北に配され、両者が軒廊でつながっていたものと想定されている。大安寺についてはさらに資料が少ないが、食堂に付属する建物として「廊」があるとされる（以上はいずれも『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研 1959）。

以上から、古代寺院においては、食堂がその機能を果たすためのさまざまな施設が群をなして食堂背後に存在し、中でも「殿」や「食殿」、「廊」といった建物が食堂に付属していたことがわかる。「食殿」とも呼ばれた薬師寺十字廊もこうした建物の一つと考えられるが、これが梁行の大きな東西棟建物ではなく、東西方向の建物と同規模の南北廊が接続して十字形を呈している点が、特徴といえるであろう。



調査風景